

1 年 生 部 会

1 子どもの姿の捉え

入学してきた子どもたちは、小学校の生活に対して、大きな期待と同時に不安も抱えている。入学前の生活では、幼稚園・保育園で年長者としての役割を果たしてきた。その中で培った自信が小学校への期待として表れる。しかし、小学校という枠の中では、一番の年少者という立場になる。生活の仕方も行動範囲も大きく変わる、その流れに自分を合わせていくことができるかという不安を持つことはもったもな事である。本校では、その入学期に子どもたちが異校種にゆっくり順応できるよう、接続期を設けている。接続期では、入学前の生活を十分にくみ取り、無理のない時間の使い方や学習内容を柔軟に扱うことで、子どもたちの自信を失わないようにし、移行させていくことをねらっている。また、子どもたちにとって、新しい環境全てが異質のものである。附属幼稚園での仲間関係もあるが、120人（各クラス40人）の新しい関係を築いていかななくてはならないのである。

子どもたちは、自分の居場所を作るために、様々な自己表現をしていく。その場面を多く取り組み、自分が出せるという安心感を持たせることが大切であると考えている。その1つの場面として、朝のスピーチの取り組みがある。

ファミリーでお話（5月）

A：土曜日は、ウィーっていうゲームをして、初めてウィーをしたのね。DSもしたの。

B：どこで？

A：うちで。

C：土曜日7時に「しむらどうぶつえん」みた？

四人での活動である。話し手のAは、自分の伝えたいことを言っている。聞き手の3人は、聞いてはいるが、自分のアンテナにひっかかったことのみで反応して言葉を発している。聞く・話すという形式になっているが、一人一人が自分の表出としてその場を感じている。

クラスみんなへお話（5月）

Y：西武にお買い物に行ったのね。お勝手の電気が消えちゃったのね、毎日消えるのね。40のを買ったのね。電気ついたの。それから、何買ったっけ。卵買ったの。チャーハン作るから。白カレー食べたの。手作りなの。にんじんの皮むいてルー入れて。ホワイトカレーとチャーハン食べたの。

クラス全体へ話している場面である。言いたいことは、「買い物に行ってそこで買ったもので夕食を作ってもらって食べた」それに、自分が話しながら思い出したことを付け足しておかなくちゃ、と思ったことをつなげて話しているのである。ここでも、聞き手を意識してというより、自分の表出としてその場を感じている。これらの様子が、この時期の子どもの実態であり、そのありのままを教師は、まずは受け取る肯定的な姿勢が重要だろう。

2 教師のねがいと手立て

子どもたちの実態から、自分の思いや考えを出せるという満足感を持たせることが大切であると考えた。自分がこの環境の中での安心感を持つことで、周りを意識したり、友だちとのかかわりを広げたり

することができる。その手立てとして、まず、「話す」そして、次の段階として「聞く」という視点を入れていくことで、「他者を意識する」ことができるようになるのではないかと考えた。

そこで、具体的に学年として取り組んでいこうとしたことは、

① 学校、学級に安心感を持てるようにする

自分の思いをまず、表出すること。その充実感を味わわなければ、友だちの話を聞こうとは思わない。自分の居場所を感じ、安心して生活が送れるようにする。

② 人と話すことを楽しむ・話せて良かったという経験を積む

スピーチや学習の中で、自分の言葉を受け取ってもらえた、自分が思っていることが言えた、できたという経験を随所に入れ込むこと。そのつなぎ役を教師が丁寧に行う。この教師の声かけや態度（しぐさ）が、子どもたちのつながりの質を高めていく1つの見本になると考えている。

かずみつけ（かずとかたち・5月）～今まで、4つのものを探していた子どもたち、5みつけで～
A：「1年生のフロアに黒板は、5こ」 B：「ピロティのベンチは、1列に5個ずつ」
C：「5ファミリーも5？」 D：「5ファミリーは、1つしかないよ」
E：「5年生も5」 F：「5年生は、いっぱいいる」
D：「1つしかない、5がある」 B：「5つある5とちがうね」
T：「5でもいろいろな種類がありそうだね。2つ出てきたけど、どんなふうに言ったらいいかな。」
→この後、「5つある5」と「1つしかない5」というクラスの中での共通言語となった。

③ 聞いたり、見たりしながら、みんないろいろだなと思える

自分も思いを表出するが、友だちもそれぞれに表出するのである。そのことに気づくことが、他者を意識する芽になる。その時、必要になるのは、「聞く・見る」ということである。そこには、「いいな～」という共感もあるが、「えっ」「ちがう？」などと心が揺れる場面が持てる。両方の感覚をもつことを意識させる。

大学キャンパスのしぜん（新しい世界との出会い）

イタドリ（4月）

C：初めて見る植物??

T：名前を教え、食べてみる→C：まねをして、食べてみる（美味しいとは誰も言わず）。

※こんなもの食べられるのかと全く新しい世界を知って、驚いていた。

アジサイ（6月）

C：学校の行き帰りや家の近くで目にすることができるので知っている子どもが多い。

T：2種類のアジサイを提示 →C：違いの観察から、花の形の違いに気づく。

T：斑入りガクアジサイ見付けを課す。

→C：ファミリーで夢中になり、大学キャンパスで探し、苦労しながらも何とか見付け出した。

新しい世界の発見は、経験が少ない子どもたちには自分ひとりでは無理なことである。教師の声かけや態度（しぐさ）が極めて重要な役割を果たす。子どもたちにどのような気づきをさせるか、そのためにどんな素材を持ってくるかが教師の力であると考ええる。

この時期の子どもたちにとって、教師の役割は2つある。

①子どもたち一人一人の声やしぐさを受け取り、また全体に返していくこと。

②子どもたちの気づきを生み出すために、教師自らが新しいもの・ことを子どもに投げかけること。

3 実践からみた子どもたちの姿

このような、接続期の捉えから継続的に子どもたちの「話す」こと「聞く」ことに着目し、実践を重ねていく中で、いろいろな変容が見られた。

① つなげる学び（ことばの学習から）

11月中旬に、読んだ本の中からお薦めの本を選んで紹介する学習を行った。ちよつと時間のある時には、手提げの中から読みかけの本を出して読めるようにしていること、教室のすぐそばに本のコーナーがあることなど、読書への関心は高まってきている。

友だちが読んだ本にも目を向け刺激し合い、さらに読書の広がり期待して学習を設定した。各自が紹介する本を決めたら、画用紙一枚に、絵と文でどんなお話なのかを書いておく。それを見せながら、教室の黒板前のコーナーに集まって発表しあつた。

Y男の発表とそれをめぐるやりとり

Y：僕が紹介する本は「ベンジーとおうむのテリー」というお話です。オウムが屋根の上によつて降りられなくなって、レスキュー隊がきて助ける本です。ちよつと面白い本です。

A：その建物はマンションですが。一戸建てですか。

Y：一戸建てです。 A：何回建てなんですか。 Y：2階です。

B：オウムは捕まるんですか。 Y：捕まります。

C：オウムは飛べるのですか。

Y：飛べます。オウムが逃げちゃつて、屋根に作つていた巣にいつたの。そこからいなくなって、
～以下省略～

このやり取りに限らず、質問が活発に出された。Aの最初の質問は、一見すると、何でマンションが一戸建てを聞くのか、やや的外れな質問のように思える。しかし、オウムが逃げたはしご車が屋根にのびているYの描いた絵を見て、どれくらいの高さかを知りたかつたのであろう。続く質問は何階建てか、である。どのくらいの高さのところにおウムがいて、レスキュー隊を呼ぶほど大事件になつたんだなど、発表者の話を聞きながら思いをめぐらせていることが伺える。A、B、Cと質問され、Yも言い足りなかつたことを付け加えながら話している。

まだまだことば足らずではあるが、もっと聞きたいという思いを持ち、相手の話す情報に寄り添いながら聞こうとする姿が見られた。また、話し手も、質問されることで伝わりきらなかつたことを自覚しつつ修正、付加しながら伝えようとすしていることが見られた。

② まねる学び（算数の学習から）

12月算数での「大きな数」の学習でのこと、数え棒のつかみ取りから、自分のとつた棒を机の上に並べてみる。みんなが見て分かり易いようにするにはどうしたらいいか、それぞれに机の上に棒を並べ、見合つた後もう一度自分の棒を並べ直す場面での子どものつぶやき。

A：10の束がいいと思つたけど、5ずつの方がわかりやすそうだから、変えてみる。

B：2のが、5つっていうのがいいと思つた。 C：縦に揃えるといいのかも。

A：Bちゃんのやり方で、やってみる。

D：みんな同じ、まねっこになつちゃうのかな。 C：同じでも良いやり方はいいよ。

最初は、自分だけのやり方を主張していた子どもたちも、それぞれに並べられた棒を見ながら、「あれ、あっちの方がいいかな。」「あの並べ方していいのかな。」というつぶやきが多く聞かれた。自分を

主張するためだけでなく、友だちのやっているものを見て、「やってみたいな。」と心が動く場面であった。真似るという方法は、子どもたちの経験を増やすためにも大切である。自分の考えを言いつつ、友だちの考えに寄り添っている姿がここに現れている。

③ ぶつかる学び（なかまの学習から）

<p>1学期「つどうどうぶつえん」 一人一人が自分の興味のある動物を作ろう ↓（自己の思いの表出） イメージと、実際に作れるものは違う ↓（あれっ？） でもなんとか、作り上げる ↓（できた） 保護者や幼稚園児に作ったものを見てもらおう （やって良かった）</p>	<p>2学期「つどうまつり」 グループで、お店を決めて準備をする ↓（友だちの思いをうけとる） 自分の好きなことができない。もめる。 ↓（あれっ？・ちがう！） なんとか、協力して準備をする。 ↓（大変だけど、頑張ろう） みんなで、つどうまつりを行う （やって良かった・??だった）</p>
---	--

同じ物作りの活動でも、1学期と2学期では、明らかに教師の意図が違う。1学期は、個の思いを十分に引き出し、個の中で葛藤したり、満足したりしている。そして、全体として大きな活動になることで、子どもたちは喜びを感じているのである。そこで、2学期は、グループを先に決め（この場合は、2ファミリーごと8名のグループ）その中で、何のお店にするか決めさせた。ここでは、自分の好きなことではなく、友だちとの思いのすり合わせが必要になる。そこが、教師の意図的な働きかけである。グループで行うことで、うまくいくことも沢山あるが、やはり、つまずきがある。その感覚を感じながらも、終末では、「楽しかった」「やって良かった」という感想が述べられた。みんなとやると楽しい、いろいろだなと思えるようになってきているのだと考える。そして、常にスムーズに行くように仕掛けをするのではなく、つまずきから学ぶ姿勢を育むために、意図的に何をしかけ、そこに意味を持たせるかということが大切である。「公共性」を育むリテラシーの基盤はここにあるのではない。

4 公開研究会での授業提案や協議会討議を経て

(1) 部会として授業改善のために目指したことや、そのための手立て

子どもの学びをつなぐ役割を心がける（発話の受け取りと返し・新しい気付きの芽の投げかけ）

(2) 具体的な成果や問題点

- ・いろいろな気付きや自分の思いを表出することが少しずつできるようになってきている
- ・友だちの言葉に耳を傾けようとする姿が、少しずつ見られるようになってきている。しかし、まだまだ自分が中心である姿が多く見られる。
- ・友だち関係から、自分の思いを周りを見ながらセーブしてしまう姿も少し見られる

(3) 協議会での話題・意見・質問など

- ・幼・小の「接続期」について、小学校としてどのように取り組んできたか。
- ・幼稚園、保育園の学びをどう小学校へ繋げたか、そこで教師がどのような取り組みをしたか。
- ・なかなか表出できない子（ことばで表せない子）にどのような投げかけをしているか。

(4) 協議会を経て、今後の課題であると認識したこと

- ・一人一人の安心から、周りへ意識を広げていくために次のステップをどう行うか。
- ・発達としての学びから、一人一人の学びをどう捉え、伸ばしていくか。
- ・この出発から、6年間を見通した学びの積み上げを教師・学校がどう考えていくか。